

皆様おはようございます。

おとといは中秋の名月とのことでした。良い天気の日で夜もくっきりと月を見ることが出来ました。朝晩は涼しく、時に肌寒く、昼は時に夏のように暑い、寒暖の差がくっきりと分かれるこの頃ですが、どうぞ皆様ご自愛ください。

さて今日はヤコブ書2章の後半が開かれています。

ヤコブ書には、冒頭から信仰の大切さが記してありました。

1:2 わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。

1:3 あなたがたの知っているとおりに、信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである。

1:4 だから、なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。

信仰は試されなければならない。そうすれば忍耐を生じ、すなわちそれは忍耐を伴った生きた信仰を生み出すという風にも理解できると思います。

様々な試練の中で、信仰により、信じているからこの試練も乗り越えることが出来るとの核心に酔って乗り越えていくということ。信仰というものがただの床の間の置物になっていくのではなくて、日々日々使う金属の道具がピカピカしていて手で触って、力を込めて触れて、摩擦の中でピカピカに輝いたり削れたりして手にピッタリと合うものに使い込まれているのを見ますと、どんなにかその道具がその職人さんにとって大切な道具かがよく分かるものですが、私たちにとって信仰とは、それ位に私たちにとって現実的な、身近な私たちの生きるためのよすがであり手段となっているだろうかと思ひめぐらすものです。

運転免許を取るために何か月も教習所に通い、試験を受けてついに運転免許証を手に入れるのは、それによって公道の上を自分で車を走らせるためであり、運転免許証を取ったと言ってそれを額に入れて鑑賞するためでないことはよくよく分かることですが、信仰を得ても、それを働かせることがなければそれと同じではないかと、そう語りかけられているように思います。

平静の時にはいいのですが、何かが起こった時に私たちがどうその事実の中で思い、考え、行動するのか、そこに信仰によってどしりと立って信じ、そしてただのやせ我慢ではなくて、神様をどんなときにも信じるが故のどしりとした忍耐を養わせて頂くということが、畏れ多くも「なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となる」ということなのではないかと教えられるのです。

2:14 わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。

信仰について、その大切さについては書き記されています。しかしここでは生きて働く信仰、私たちの助けとなる、救いとなる、役に立つ信仰とはどのようなものかが書き記されます。

15 ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いている場合、

16 あなたがたのうち、だれかが、「安らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい」と言うだけで、そのからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとしたら、なんの役に立つか。

17 信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。

この信仰は、私たち自身のために役に立つものでなければならず、それは同時に信仰の実践によって、私たちの周りの方々のためにも役に立つものでなければなりません。

信仰は、私たちの周りに着る物、食べる物に事欠く人がいれば惜しまずに与えるという行動を要請します。

信仰とは、常に神様の前にある私たちの良心であり、心の本音の部分です。この本音の部分でいつも私たちは神様の前にどのように生活しているのか、そのようにして信仰を吟味し、信仰の命が私たちの心の内に動き、語り、促し、行動へと導く、これが生きた信仰であると聖書は語ります。

2 コリント 13:3 なぜなら、あなたがたが、キリストのわたしにあって語っておられるという証拠を求めているからである。キリストは、あなたがたに対して弱くはなく、あなたがたのうちにあって強い。

13:4 すなわち、キリストは弱さのゆえに十字架につけられたが、神の力によって生きておられるのである。このように、わたしたちもキリストにあって弱い者であるが、あなたがたに対しては、神の力によって、キリストと共に生きるのである。

13:5 あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。

13:6 しかしわたしは、自分たちが見捨てられた者ではないことを、知っていてもraitたい。

信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものであると 17 節にあり、これはどぎつい表現のようにも思いますが、これは誰かが信仰について死んでいると裁

く言葉なのではなくて、生きた信仰を持ち続けなさいと言う幸いな強い促しであるということが出来ます。

18 しかし、「ある人には信仰があり、またほかの人には行いがある」と言う者があろう。それなら、行いのないあなたの信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの行いによって信仰を見せてあげよう。

19 あなたは、神はただひとりであると信じているのか。それは結構である。悪霊どもでさえ、信じておののいている。

20 ああ、愚かな人よ。行いを伴わない信仰のむなしいことを知りたいのか。

信仰を持っていればすべてそれで良いと言い、問題ないと思うことについて、その信仰の深さを探りなさいと聖書は語ります。知的な面における神理解を信仰というのであれば、悪霊でさえその答案で点数を取ることが出来ると聖書は語ります。唯一の神ということなどは、悪霊もよく知っており、その神様の力強さも権威も、熟知しているがゆえに、神に背く自分への裁きを恐れて打ち震えているほどで、そんなにもよく神様の事は悪霊でも承知しているというのです。ですから私たちが通り一遍の知識において神様の事を知っているからと言って、それが何のためになるのだろうかと聖書は語ります。もっと深く信仰について探求し、探り、知り極めよ、そうすればそれはただの知識の断片にとどまらず、あなたのうちに生きて動く救いの力となり、あなたの行動の源泉となり、あなたはこの信仰によって導かれ、動かされ、語り、行い、じっとしてはられないだろうと聖書は語ります。困っている人を見て、能書きを垂れて、立派そうなことを言って、適当に祈って何もしないでその場を離れることなんて、到底不可能だと聖書は語るのです。神様が、世界を創られた創造者である神様が、権威者である神様が、反逆のうちに、自業自得の内に離れ去って行った人類のために、その人たちを愛する独り子イエス・キリストのむごたらしい十字架による身代わりの死による贖いによって、再びご自分のもとに取り戻して神様との正しい関係に入れ、実に神の子どもとして、神を愛する者たちに約束された御国の相続者として下さるといふ神様の壮絶な、空前絶後の恵みを心底知らされたものが、どうして行いの伴わない、冷淡な傍観者でい続けることが出来るのでしょうか。

ああ、(からっぽで、手に何も持っていない) 愚かな人よと語りかけられていますが、行いを伴わない信仰はむなしい。本当に虚しいのです。机上の空論、絵に描いた餅なのです。それは役立たずで、人を救うことが出来ないのです。

13 あわれみを行わなかった者に対しては、仮借のないさばきが下される。あわれみは、さばきにうち勝つ。

17 信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。

21 わたしたちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたのではなかったか。

22 あなたが知っているとおりに、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ、

23 こうして、「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」という聖書の言葉が成就し、そして、彼は「神の友」と唱えられたのである。

24 これでわかるように、人が義とされるのは、行いによるのであって、信仰だけによるのではない。

25 同じように、かの遊女ラハブでさえも、使者たちをもてなし、彼らを別な道から送り出した時、行いによって義とされたではないか。

26 靈魂のないからだが生んだものであると同様に、行いのない信仰も死んだものなのである。

アブラハムにとって、待ちわびてついに奇跡的に与えられた愛するわが子イサクをいけにえに捧げるなんてことは荒唐無稽の極みでした。神様という方はなんというひどいお方なんだ、これだけ喜ばせておいて、その成長を見て、育て、愛して育て、そして殺せというのなら、最初から与えなければよいではないか。今までの事はいったい何だったのか、私たちがあっても、こんな命令を神様からお聞きしたら、理解できずに、怒りと神不信に陥って、信仰などかなぐり捨ててしまうのではないのでしょうか。こんな不条理なことは見過ごすことは出来ない、いくら神様であっても言っているいいことと悪いことがあると、神様に真正面からぶつかってしまうのではないのでしょうか。

しかしアブラハムは従いました。

創世記 22:1 これらの事後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。

22:2 神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。

22:3 アブラハムは朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者と、その子イサクとを連れ、また燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた。

22:4 三日目に、アブラハムは目をあげて、はるかにその場所を見た。

22:5 そこでアブラハムは若者たちに言った、「あなたがたは、ろばと一緒にここにいなさ

い。わたしとわらべは向こうへ行って礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます」。

22:6 アブラハムは燔祭のたきぎを取って、その子イサクに負わせ、手に火と刃物とを執って、ふたり一緒に行った。

22:7 やがてイサクは父アブラハムに言った、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは言った、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。

22:8 アブラハムは言った、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」。こうしてふたりは一緒に行った。

22:9 彼らが神の示された場所に来たとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。

22:10 そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、

22:11 主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答えた、「はい、ここにおります」。

22:12 み使が言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。

22:13 この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。

22:14 それでアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。これにより、人々は今日もなお「主の山に備えあり」と言う。

神様は彼の信仰を見ておられたのです。

ヤコブ 11:17 信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。

11:18 この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。

11:19 彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。

アブラハムは信仰のゆえに、神様は彼に子孫の祝福を約束されたのだから、仮にイサクを捧げても、神様ご自身のお約束のとおりにはヤコブを死者の中からでも蘇らせてくださるとまで信じて、信じ切って、無理難題と思えるような神様の道に従い尽くしたのです。そこで神

様の彼の信仰の通りに彼の息子イサクを生き返して渡されました。

「主の山に備えあり」

ここに父なる神様が愛する独り子であるイエス様を、神のひとり子であるにもかかわらず、その傲慢な反逆児である被造物である人間のために捧げたという不条理を読み解く鍵があります。罪のもたらす報酬は死であり、そう考えましたら、人はどれだけ血を流して神様の前にささげものをして詫びを入れなければならないのでしょうか。それが罪から逃れられない人の定めです。しかしその人の定めを黙って見てはいられない神様は、実にそのひとり子をさえ惜しまずに犠牲にして、ご自身の作った被造物のために救いを成してくださいました。羊を道具にして生きていく羊飼いが、その商売の道具である羊のために自分自身のいのちをとして狼から守るといったとえの通りです。

神様はそういう愛と誠のお方です。無理難題をおっしゃる方ではなくて、試練と共に脱出の道を開き、私たちが耐えられないような試練に合わせるお方ではありません。主は私たちが備えなければならない、私たち自身の命、私たちの愛する家族の命を救うために愛する御子を身代わりとして犠牲にして下さった方なのですから。

ですから私たちは、恐れることなく、疑うことも惑うこともなく、神様の御言葉と御思いの中に突進して、そのお考えを実行することを宝としてよすがとして考え、進みゆくことを望んでいこうではありませんか。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。私たちが「完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人」となるための信仰の修練のため、忍耐を生み出すために必要なのは信仰の実践であることをお教えくださいまして、ありがとうございます。私たちが本当の信仰のあり方を極め知り、神様に対して信仰においても信頼においても揺るがないものと成長させてくださり、神様の近くに歩む実り多き一週間の日々でありますように、どうぞお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン